

## 平成20年度第1回北海道食の安全・安心委員会遺伝子組換え 作物交雑等防止部会の概要

平成21年2月17日  
北海道食の安全・安心委員会  
遺伝子組換え作物交雑等防止部会

1 開催日時 平成21年2月3日(火) 10:00~12:00

2 出席者

- 委員 松井部会長ほか特別委員5名
- 道側 農政部荒川参事監ほか

3 審議の内容

(1) 審議事項

- 遺伝子組換え作物交雑等防止検討調査事業成績について

(2) 主な論点及び意見

### 〔3年間の試験成績の評価〕

- ・ 現行の隔離距離基準で交雑が認められたが交雑率は極めて低いレベル(遺伝子レベルで検出限界以下)
- ・ これ以上の距離の延長や距離以外の追加的な措置(被覆等)により交雑率の低減は可能と考えられるが、交雑を「ゼロ」にすることはできない
- ・ 気象条件(気温、風等)などが交雑率に影響を与える
- ・ 3年間の交雑調査により一定の成果が得られており、継続的な調査は求めない

(交雑防止基準等)

- ・ 科学的に交雑率「ゼロ」というのはあり得ない
- ・ 隔離距離基準を変えるべきではないのではないか
- ・ 交雑率がゼロでないから栽培が一切ダメということではないのではないか
- ・ 気象条件等(冷害等)によって交雑率が変化する作物の特性等に応じた対応も必要ではないか
- ・ 交雑防止基準をどのように考えるのかは、委員会等で議論すべき
- ・ 周囲の状況により昆虫の訪花行動も変わり、交雑率も変わるのではないか

(試験研究)

- ・ バイオ産業の振興や将来に備えて試験研究を進めていくことが必要
- ・ 試験研究は重要であるが、野外での栽培は慎重に進めるべきではないか

(北海道におけるGM作物)

- ・ 北海道は食料生産基地としてのステータスがあり、北海道ブランドを傷つけることのないような考え方も含めて判断が必要
- ・ 地域として農業をどのようにしていくのかという視点も必要

(その他)

- ・ 消費者はGM食品・作物に対して不安を感じており、できるだけ正確な科学的データを公開し、リスコミなどを通じて理解を深めてもらうことも必要
- ・ GM作物・食品については、委員会等で安全性や表示などトータルな議論も必要

## 主な意見

(西村委員)

- 交雑率「ゼロ」というのはあり得ない。数字としてゼロになるまでダメだというのはいかがなものか。小さい数字をほぼゼロと考えるのかどうかという問題はあるが。
- 作物ごとに考えて、テンサイのように通常の栽培ではほとんど花をつけない作物では、交雑は試験結果よりももっと小さくなる。
- GM作物の安全性が確認され、相当量の食品が輸入されていることを踏まえ、また、バイオ産業の振興や将来的なことを考えると、GM作物に関する研究は続けていかなければならない。
- バイオ産業の推進を図るのであれば、条例の中に研究の推進を謳うことも必要。

(齋藤委員)

- (交雑による)野生生物への遺伝子浸透は軽視することはできない。
- この部会では、食品の安全性の部分と交雑の防止を並べて議論することはできない。
- 野外栽培において、ゼロはあり得ないが慎重の上にも慎重に進めていかなければならない。
- 周りに何を植えるかにより、昆虫の訪花行動も変わり交雑率も変わるのではないか

(西村委員)

- 3年間の試験データから交雑率ゼロはあり得ないというところから議論をスタートした方がよい。
- これ以上距離を延ばしても、率が小さくなるだけ。
- GMに関する安全性や栽培、表示など総合的な議論が本委員会では時間の関係もありなかなかできない。本部会で交雑だけでなくそういう議論をして、その結果を本委員会で議論してもらうこともよいのではないか。トータルに議論しなければ、前には進まないのでは。

(齋藤委員)

- GM部会の役割は、試験結果について科学者の立場で議論すること。ゼロにできないということはわかったが、基準をどのレベルにするのかは本委員会等で議論すべき。

(山口委員)

- 現在の防止基準は、距離による隔離という考え方であるが、3年間の試験成績により被覆などの措置を加えることにより交雑の低減が担保されるのではないか。
- 今後の役割としては、どういう条件であればどの程度の交雑があるのかということの基本的なデータを開示していくという形になるのでは。
- 将来的な方向としては、混入率をどの程度にするのかということもあるのでは。
- 北海道は食については1つのブランドとなっており、これを傷つけないような判断をしていくことが必要。
- 科学的に安全といっても消費者は安心できないということを踏まえ、科学者としてGM作物の理解を深めていくことが必要。

(荒木委員)

- 交雑率はかなり低いですが、作物によって種につき方が違う。イネだと種がたくさん付くので少率であっても単位面積当たりではかなりの数になってしまう。
- イネなど不稔で交雑が高まるのであれば、それに対する何らかの手段が必要では。
- GMについては、地域の作物やブランドをどうしていくのかという視点で考える必要がある。

(三浦委員)

- 3年間の成果として、ゼロにならないことがはっきりした。
- 当初、安全率を掛けて距離を設定したが、自然界(作物)はそれを越えたところで交雑した。これ以上、いじることにはならないのでは。
- 将来的に食料を安定的に供給することを考えると、GMを考えていかなければならないのでは。
- ゼロではないから一切ダメということではないのでは。

